
約束

武田 晴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N1418Y

【作者名】

武田 晴香

【あらすじ】

巧海と美咲の恋の物語。

2人の絆はメールのやりとりと電話だった。

ちょっとしたリアルな恋愛ストーリーです。

クライマックスをお楽しみに☆

出会い

オレはケータイを見ていた。

《おはよう。今日もお仕事頑張ってねー。タクちゃん大好きだよ。》

いつも決まった時間に美咲からメールが届く。

美咲はオレの彼女で5歳下の二十歳の大学生。オレ（巧海）は高校卒業してすぐに仕事に着き、今は仕事を覚えて早く一人前になる事を目標にしている。

《おはよう。行ってくる。美咲も勉強サボらず頑張れよ。》

オレはたまにしか返信しなかった。

けど美咲は暇があれば、つまらないことでもいちいちメールを送ってきた。そしていつも最後には大好きだよ。と書いてあった。

美咲とは友達で紹介で出会った。

初めて会った時、美咲は花柄のシャツにショートパンツをはいていた。笑顔が可愛く仕草がとても幼かった。とても二十歳には見えない可愛い女の子だった。

出会ったばかりの頃、オレはそれ程彼女が欲しいとは思っていなかった。作ろうと思えばすぐに作れる自信があったし、今は仕事が楽しくて仕方なかった。

しかし美咲はどうしても彼氏が欲しかったらしく、突然オレにこんな事を言ってきた。

『巧海君、お願い！！美咲の彼氏になって！！』

突然の言葉にびっくりした。

オレは簡単な気持ちで付き合いたくなかったし、正直、女に振り回されるのが面倒臭かった。

『ごめん…。友達じゃあダメかなあ。』

オレは悩んでやんわり断った。そして美咲は何でそんなに彼氏が欲しいのか分からなかった。

しかし美咲は何度もオレにお願いをしてきた。

『お願いー！！！！』

何度もこの会話が続いた。

そして、ついに…

『じゃあ…1ヶ月だけ…1ヶ月だけ美咲と付き合って。いい彼女で

いるから！巧海君の邪魔はしない。1ヶ月したらちゃんといなくなるから。お願いー！！』

美咲は必死でお願いをしてきた。さすがに断り続けるのも可哀想になり、9月いっぱい1ヶ月だけという約束で付き合う事になった。

美咲はオレと会った時からやたらと、カッコ良いだの、優しいだの、ステキだのを連発していた。半分、冗談だと思っていたが嫌な気分にはならなかった。女の作戦か？…とも思った。

こんな感じで2人はスタートをした。

付き合った日から美咲からは毎日メールが来た。そして夜には電話がかかって来た。

『こんばんはー！！ねえーねえー、巧海君って言い難いから…タクちゃんって呼んでも良い？？』

最初の電話って感じのトークで話しかけて来た。

『好きに呼んでくれてイイよ。』

年下の子と付き合うなんて初めてだったから会話が恥ずかしかった。

『ありがとうータクちゃん!! 美咲の事は美咲って呼んでイイから。』

『おう。』

電話も少し苦手だったから、オレは会話と言うよりはほとんど返事しかしていなかった。美咲は今日の出来事や昔の話などを散々している。とても楽しく時間があっという間に過ぎた。

1時間ぐらい話しただろうか。

オレはだんだん眠くなってきてしまった。オレの返事が少し遅れだし、美咲に眠いのがバレた。

『ゴメンねー。眠いよね？明日もお仕事頑張ってね！おやすみっ』

『うん。ありがとう。美咲もゆっくり寝ろよ。おやすみ。』

オレは電話を切ってすぐに寝た。

また夜になって電話がかかって来た。

『こんばんはー!! 何してるの?』

美咲の声は元気が良くて可愛かった。

『別に。何もしてないよ。』

オレは仕事に疲れてソファアでのんびりしながらテレビを見ていた。

『ねえーねえー、4日の日曜日って空いてる? 明後日なんだけど…』

彼氏が出来て嬉しいのか、美咲は早速デートに誘って来た。

『特に用事はないかな。』

『じゃあ、美咲とデートしよっ!』

可愛い声で言ってきた。

『おう。別にいいけど。どこか行きたい所でもあるの?』

『行きたい所はいっぱいあるよー!!』

電話の向こうで子どもみたいに美咲ははしゃいでいる。

『じゃあ、明日までに決めという。』

『うん！また明日電話かけるね！』

嬉しそうにそう言うと美咲は電話を切った。

…そんなにオレと付き合えて嬉しいのだろうか…

ふと思った。でも美咲と付き合つて2日。オレも何だか少し変わった様な気がした。

ケータイを見ながらニヤニヤしてるオレがいる。気が付くとケータイを手にしてるオレがいる。いつもならほとんど返さないのに不器用にケータイを打っているオレがいる……

そんな事を感じながら気が付くとソファで寝ていた。

会社に着いた頃、美咲からメールが来た。

絵文字がいっぱいメールは女の子らしくてとても可愛かった。彼女を作るって良いもんだな……しばらく彼女がいないオレには新鮮だった。

ギリギリに職場に着いたから短い言葉で返信した。美咲からすぐにまたメールが届いた。

《タクちゃんだあ。メール返してくれてありがとう！えっ？！夜もまた電話してイイのー？タクちゃんのカッコ良い声が聞けるっ！ありがとー！！！！美咲、これで今日も1日頑張れるよ！！タクちゃん大好きっ》

読んでいると、仕事のチャイムがなり仕事が始まった。オレも美咲からのメールで仕事を頑張る気持ちになった。

3日前と違うのは：休憩時間の過ごし方。オレはご飯を食べながらケータイを突いている。いつもならさっさと食べて寝ているが、今はメールを読んだり気が向けば返信したりしている。たいした内容ではないが、美咲からのメールは嬉しかった。ケータイの中には明るい美咲がいた。

夜になり電話がかかってきた。

ケータイはピンクに光っていた。

美咲だ！

オレは美咲からの電話やメールがわかる様に美咲だけ着信の色を変えた。サブディスプレイも美咲と表示されている。電話を取った。

『こんばんはー！！』

美咲の明るい声がした。

『おう。美咲はいつも元気だねえ。』

最初よりも少し楽に話しが出来た。

『うん。だってタクちゃんから夜電話してもイイって言ってくれたからー！嬉しいの。』

美咲はちょっと高めの声で、とても可愛いしゃべり方をする。

『そっか。美咲は単純だな。で、どこに行くか決めた？
いつもの様にソファアに転がりながら言った。』

『うん。でもね、美咲、行きたい所がいっぱいあり過ぎて困るー』

『ははは…どこに行きたいん？』

美咲の頭の中はデートの事で頭がいっぱいの様だった。

『んーとねえ、遊園地も行きたいし、動物園も行きたいし、水族館も行きたいー!! 後は…』

『美咲は子どもみたいだな。全部子どもが行きたいって言う場所ばかりじゃん。』

二十歳の子が行きたいデートはそう言う所なのだろうか。ふと思った。

オレは外に出るデートはあまりした事がなかった。
今までのデートと言えは…ご飯を食べに行ったり買い物に付き合ったりしたが、ほとんどはオレの家でゴロゴロしながらDVDを観て過ごしていた。

『えー? そんな事ないよおー。カップルも多いしデートスポットじやんー!!』

美咲がブーブー言いながら言い返してきた。

『そっか。わかった！できる限り一緒に行こう？オレも今月の休みはなるべく予定入れずに空けておくから。』

はしゃいでいる美咲の声を聞いていると、オレも楽しくなって全部の場所を連れて行ってやりたくなった。そんなに喜ぶなら、どこだって連れて行ってやろうと思った。美咲の彼氏でいるのは今月だけだし美咲の事もっと知りたくなった。

『…うん…ありがとう…でも…1ヶ月じゃ…行けないかあ…』

美咲は忘れていた約束を思い出したかの様に声のトーンが下がった。さっきまでワイワイ話しをしていたのに急に美咲が落ち込んで、時々会話には静かな間があいた。

『ゴメン…でも、約束だったし…。今は美咲の彼氏なんだから明日は楽しもう？?』

…本当の事を言っただけなのに、いけなかったのだろうか…オレには女の子の気持ちがよく分からなかった。
美咲は本気で落ち込んでいる様だった。

でもしばらくすると電話からはまた明るい声が聞こえた。

『うん…』

そうだね！！まだ始まったばかりだし、まだまだ先は長いしー！！』

またいつもの美咲に戻った。

いや、無理に明るく振舞っていたのかもしれない。

『で、明日はどうするの？水族館でも行ってみる？ちよつと離れてるからドライブにもなるし。』

オレは美咲が言っていたプランの中から選んだ。

『うん。あー明日が楽しみ過ぎて寝れるかなあー。起きたらカッコ良いタクちゃんに会えるー。幸せー。』

また美咲ははしやいでいた。

『明日は朝から出るぞ。9時に家の近くのコンビニまで迎えに行くから。ちゃんと寝ろよ。』

『はあい!! タクちゃんもねっ!! おやすみー』

電話を切った。

オレは電話でみせた美咲の寂しそうな声が気になった。本当に嫌だったのだろう。もう約束の事はあまり触れないでおこうと思った。

美咲とは出会った日しか会っていないから、明日で会うのは2回目。オレも美咲に会うのが楽しみだった。

オレはすっかり美咲のペースにのまれていた。

遅刻したらいけないとアラームをかけて寝た。

ふとコンビニの中をみると美咲らしき人がいた。一度しか会っていないからなんとなくしか覚えていない。
向こうも気付いたのか、こっちに向かって歩いてくる。

『おはようー。タクちゃん!!今日はよろしくお願いしますっ!』

やっぱり美咲だった。

今日スカート姿で可愛かった。美咲は車に乗って、持っていたカバンを膝の上に置きシートベルトをしめた。そしてコンビニで買ってくれていたジュースを渡してくれた。

『迎えに来てくれてありがとう!』

近くにいる美咲に少しドキツとした。

水族館までは車で片道2時間ぐらいの所を選んだ。ドライブに行きたがっていた美咲の要望に応えた。

車の中でも美咲は元気いっぱいいろいろな話をした。会話はどんどん盛り上がり楽しかった。話しの中で美咲は結構ドジだという事が分かった。笑える話がいっぱいあった。

2時間のドライブも美咲と一緒にだといった間に経ち、すぐに目的地に着いた。

この水族館はまあまあ大きくて、色んなショーがしていると有名だった。

水族館の入場口はお客さんの数は少なかったが、中に入ると意外と

多くてびっくりした。日曜日だし人が多いのは覚悟していた。家族連れも多かったがカップルも目立っていた。

中に入ってすぐの所に大きな水槽が見えた。

美咲は水槽の中の魚を見つけると一直線に歩いて行き、『タクちゃん、これスゴイよー!』と言いながら喜んでいた。勝手に進んで行く美咲を見て、迷子になるといけないと思いオレは美咲の手をギュッと握った。

美咲は驚きながらこつちを振り返った。びっくりした顔の美咲はすぐ笑顔になり『ありがとうー!嬉しい。』と繋いだ手を見た。

美咲に初めて触れた瞬間だった。

その後も2人は手を繋ぎながら館内を歩き色んな魚を見た。美咲はデジカメで写真を撮ったりワイワイはしゃいでいたが繋いだ手は離さなかった。

この水族館の目玉であるショーは、あまりの人の多さに見る事が出来そうになかった。しかし美咲は人が多くて全く見えないショーの会場から出ようとしなない。

『ショーは残念だったな。こんなに多かったら見れないよ。また今度来ればいいじゃん。』

オレはそう言って繋いでいる手を引いた。すると突然、美咲がオレの手から離れた。下を向いて悲しそうにしている。

『嫌…』

子どもがタダをこねるみたいに美咲が言った。

『今度って…』

美咲達には今度は無いもん!!
今見なきゃ…次は無いもん…』

泣きそうな顔でこっちを見た。

オレはそんなつもりで言ったんじゃない。何も考えずに言った事を反省した。

オレはふと横をみるとお土産売り場が目に入って来た。

『ゴメン…。』

やっぱり…こんだけ人が多かったらショーは見れないかなあ…

でもショーは見れないけど、ここに来た記念にぬいぐるみでもお土産に買って帰るかあ!?! ペアでもいいよ!!!』

また美咲の手を取り、繋ぎ直した。

悲しそうな顔をしていた美咲はチラッとショーの方を見て諦めたのか、またオレの方を向いて笑顔になった。

『うん!!! ぬいぐるみ買いに行くー!!!』

元気な美咲に戻った。

そっか…この恋は1ヶ月の約束だもん…

今度は…無い…かあ…

美咲の言葉が頭から離れなかった。

お土産売り場に行くと美咲はどのぬいぐるみにしようか散々迷っていた。何個もぬいぐるみを手に取っては戻しての繰り返しだった。そんな美咲を見ていると可愛くて仕方がなかった。

結局、ショーが見れなかったイルカのぬいぐるみに決めていた。なぜそれに決めたか聞くと、“幸せになれるイルカ”というキャッチフレーズを見て選んだと言う。

オレはイルカのぬいぐるみを2つ手に取ってレジに並んだ。お土産売り場も少し混んでいた。美咲はレジの横にあるキーホルダーを見ている。レジ待ちの間、オレは後ろにもいっぱい人が並んできたから、先に美咲を店の外に出してゆったりしたスペースで待つように言った。

少し待ち順番が来ると、さっき美咲が見てたキーホルダーも一緒に入れてもらった。美咲の喜ぶ顔想像出来た。

会計はすぐに終わり、オレは急いで美咲の所に行った。

水族館は広くて結構歩いた。

お昼も過ぎお腹も空いてきたから、併設しているレストランで昼ご飯を食べる事にした。

メニューを見て、美咲はすぐに決めた。オレは優柔不断でなかなか決めれないから美咲が2番目に食いたい物を選んでもらってそれを注文した。

料理が運ばれてくると、美咲の皿の上には魚のフライ。そしてオレの皿の上にはエビフライが乗っていた。

さっきまで元気に泳ぎまくっていた魚達のが衣にくるまれて出てきた。

オレは美咲と目が合うと笑ってしまった。

『何でこれにしたの？こいつら、さっき見たよね？？』

笑ながら言った。

『だって、メニューの中で1番食べたかったから！！』

美咲も笑ながら応えた。

流石、美咲だな。と思いながら料理を口に運んだ。料理はとても美味しかった。目の前には笑顔で口いっぱいに頬張っている美咲がいる。きつと美咲と一緒にだから美味しいんだろうなあと思った。

帰りは少し遠回りをして帰った。帰りの車の中も美咲は元気にいっぱい、今度のデートプランを考えていた。

『来週は、動物園行きたい！！！美咲、動物触れんけど！！！！』

『動物嫌いな？』

『うん：ちょっと苦手ー』

そんな会話をしながら来週のデートプランが決まった。美咲は何でも好きでもない動物園に行きたがるのか分からなかった。

美咲は実家に住んでいるから、早めに帰らないといけない。そう言う所はやっぱり子どもで可愛かった。

20時頃、朝迎えに行ったコンビニまで帰ってきた。隅の方に車を止め、もう少しだけ美咲と話をした。今日はずっと一緒にいたのに、まだそばにいたかった。

オレは今日買ったぬいぐるみを思い出し、美咲に渡した。美咲はすぐに袋から開けると嬉しそうに手に取っていた。そして底のほうから小さいキーホルダーを見つけるとびっくりした顔でオレを見て、今日1番の笑顔で喜んでいた。

美咲の笑顔は本当に可愛い。

『タクちゃん。今日は本当にありがとう!!めっちゃ楽しかったよー!!カッコ良いタクちゃんとデートが出来て、美咲は幸せだなあー!来週も楽しもうねっ!!』
車から出ようとした時に、振り返って美咲が言った。

『オレも楽しかったよ。ありがとう。』
素直な気持ちを伝えた。

『タクちゃん…
美咲とタクちゃんって今はカップルだよねえ?だったら…帰る前にちょっとだけ…キスしてもいい?』

美咲はいつも突然言ってくる。ちょっと照れているようだった。

『うん…』

オレはそう言っていると美咲をそっと引き寄せキスをした。美咲の唇はとても柔らかかった。目をつむると、一瞬時間が止まったような気がした。

そしてまた目を開けると、目の前には可愛い美咲がいてとても嬉しそうにこっちを見ていた。

『ありがとうー！タクちゃん大好きだよ！じゃあ、美咲は帰るね！バイバーイ』

美咲は笑顔で車から降りた。何度も振り返りながら美咲は家に帰って行った。

オレは美咲の後ろ姿が見えなくなるのを確認して、自宅へ車を走らせた。

家に着くといつものようにソファでゴロゴロした。するとケータイが鳴り美咲からメールが届いた。

《タクちゃんー！今日は運転お疲れ様です。明日からまたお仕事だねえー。頑張れる？？今日は早く寝て疲れを取ってね！今日は本当にありがとうー！！おやすみっ》

オレは返信しようと思っていたが、疲れてそのまま寝てしまった。



《はあい！勉強頑張る！！今週も日曜日が楽しみだねっ！！》

美咲は返信が早かった。

オレは小さな工場に務めているのだが、今の時期は忙しくて休みが日曜日しかない。今月は祝日があるが、どうも休めるか微妙な感じだった。美咲にはあまり期待をさせたら可哀想だから、祝日が休みかも知れない事は言わなかった。

《オレも楽しみ。他にも行きたい所があったら考えといてな。》

そう返信すると、オレは仕事に行つた。

今日もたくさん美咲からメールが届いた。教授の詰まらなかったという講義の話しや友達の話し、家での話しや、美咲のドジした話など…暇があればメールをしてきた。オレのケータイフォルダは美咲でいっぱいになってきた。オレはそれを読むのが楽しかった。

そして仕事から帰ると、“おかえり”というメールが届いた。

寝る前になると美咲から電話が掛かり、美咲の元気な声を聞いて寝た。

こんなメールと電話のやり取りが土曜日まで続いた。

土曜日の朝

《タクちゃんおはようー！！ やっと明日はカッコ良いタクちゃんとデートの日だよー。楽しみー！！！！ ラスト1日お仕事頑張ってね！タクちゃん大好きだよー！！！！》

いつもの様に美咲からメールが届いた。オレはそれを見てから仕事に行くのが日課となっていた。美咲のメールは元気がでてる。美咲と出会ってから1日があっという間に過ぎて行った。とても楽しくて毎日が充実していた。

職場では先輩から“最近お前変わったな。女でも出来たのか？”と冷やかされる。

美咲と出会って10日。まだ10日しかたっていないというのに、オレは10日前と比べ物にならないぐらい幸せだった。仕事もミス無く順調にこなせた。

夜になり、オレはまた美咲と電話をしている。

『明日は動物園デート！楽しみだなあー！！』

美咲は電話の向こうではしゃいでいた。相当楽しみにしていたのだろう。

『で、動物園以外でも行きたい所は見つかった？』

オレは美咲の行きたい場所を聞いてみた。

近くの動物園はそれ程大きくない為、すぐに見終わってしまう。

『んー。買い物行きたいかなあ。服見たい！！タクちゃん好みに

美咲を变身させて欲しいなあ〜!!!」

『分かった。でも変身しなくても今の美咲は可愛いよ。』

ちよつとオレらしくないクサイ台詞を言ってみた。

『本当に？？ありがとう。嬉しい！！！！でも、タクちゃんカッコ良いの、美咲は子どもっぽいから：タクちゃんに釣り合っていない：美咲ね、タクちゃんの事が大好きだからもっと可愛くなりなさいの！』

聞いていると恥ずかしかった。

美咲はオレの事をどう思っているんだろう…美咲の中でオレは相当カッコ良くなっている様だった。

しかし、そう思っているのは嬉しかった。

『ははは：分かったよ。ありがとう。じゃあ、明日は買い物も行くな。また朝9時にコンビニに迎えに行くから！ ゆっくり寝ろよ。おやすみ。』

またあのコンビで待ち合わせをして電話を切った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418y/>

約束

2011年11月2日15時12分発行